Ｂ５サイズで
作成しています

令和７年度大学入学共通テスト
試作問題『数学Ⅰ，数学Ａ』

［100 点］

○ **試験時間**　70 分

○ **出題範囲**　「数学Ⅰ」及び「数学Ａ」の内容から出題

「数学Ａ」については，図形の性質，場合の数と確率の２項目に対応した出題とし，全てを解答する。

問題	選択方法
第１問	必答
第２問	必答
第３問	必答
第４問	必答

○ **作成の趣旨及び留意点**

本試作問題は，令和７年度大学入学共通テストの出題科目『数学Ⅰ，数学Ａ』について具体的なイメージの共有のために作成・公表するものです。

本試作問題は専門家により作成されたものですが，過去の大学入試センター試験や大学入学共通テストと同様の問題作成や点検のプロセスを経たものではありません。

なお，本試作問題の第２問〔２〕及び第４問は新規に作成したものですが、それ以外の問題は令和３年度大学入学共通テスト本試験（１月 17 日実施）で出題された問題を充てています。

令和７年度大学入学共通テストの出題内容については，本試作問題の作成を踏まえつつ，引き続き検討することとしています。

※　**本試作問題に関する説明は，「試作問題「数学」の概要」を御覧ください。**

数学Ⅰ，数学A

（全　問　必　答）

第１問 （配点　30）

〔１〕cを正の整数とする。xの２次方程式

$$2x^2 + (4c - 3)x + 2c^2 - c - 11 = 0 \qquad \cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots ①$$

について考える。

⑴　$c = 1$のとき，①の左辺を因数分解すると

$$\left(\boxed{\text{ア}}\,x + \boxed{\text{イ}}\right)\left(x - \boxed{\text{ウ}}\right)$$

であるから，①の解は

$$x = -\frac{\boxed{\text{イ}}}{\boxed{\text{ア}}}, \quad \boxed{\text{ウ}}$$

である。

⑵　$c = 2$のとき，①の解は

$$x = \frac{-\boxed{\text{エ}} \pm \sqrt{\boxed{\text{オカ}}}}{\boxed{\text{キ}}}$$

であり，大きい方の解をαとすると

$$\frac{5}{\alpha} = \frac{\boxed{\text{ク}} + \sqrt{\boxed{\text{ケコ}}}}{\boxed{\text{サ}}}$$

である。また，$m < \dfrac{5}{\alpha} < m + 1$を満たす整数 m は $\boxed{\text{シ}}$ である。

（数学Ⅰ，数学A第１問は次ページに続く。）

(3) 太郎さんと花子さんは，①の解について考察している。

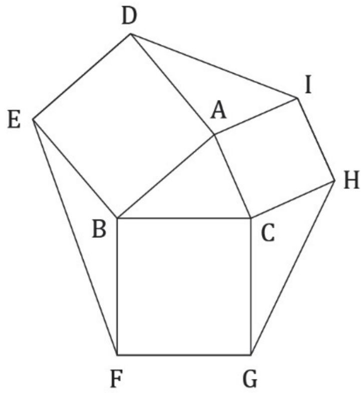
太郎：①の解は c の値によって，ともに有理数である場合もあれば，ともに無理数である場合もあるね。c がどのような値のときに，解は有理数になるのかな。

花子：2 次方程式の解の公式の根号の中に着目すればいいんじゃないかな。

①の解が異なる二つの有理数であるような正の整数 c の個数は $\boxed{\text{ス}}$ 個である。

（数学Ⅰ，数学Ａ第１問は次ページに続く。）

〔２〕右の図のように，△ABCの外側に辺AB，BC, CAをそれぞれ１辺とする正方形ADEB，BFGC，CHIAをかき，２点EとF，GとH，IとDをそれぞれ線分で結んだ図形を考える。以下において



参考図

$\mathrm{BC} = a$，$\mathrm{CA} = b$，$\mathrm{AB} = c$

$\angle \mathrm{CAB} = A$，$\angle \mathrm{ABC} = B$，$\angle \mathrm{BCA} = C$

とする。

⑴　$b = 6$，$c = 5$，$\cos A = \dfrac{3}{5}$ のとき，$\sin A = \dfrac{\boxed{\text{セ}}}{\boxed{\text{ソ}}}$ であり，

△ABCの面積は $\boxed{\text{タチ}}$，△AID の面積は $\boxed{\text{ツテ}}$ である。

（数学Ⅰ，数学Ａ第１問は次ページに続く。）

(2)　正方形 BFGC，CHIA，ADEB の面積をそれぞれ S_1，S_2，S_3とする。このとき，$S_1 - S_2 - S_3$は

- $0° < A < 90°$ のとき，$\boxed{\text{ト}}$。
- $A = 90°$ のとき，$\boxed{\text{ナ}}$。
- $90° < A < 180°$ のとき，$\boxed{\text{ニ}}$。

$\boxed{\text{ト}}$ ～ $\boxed{\text{ニ}}$ の解答群（同じものを繰り返し選んでもよい。）

⓪　0 である
①　正の値である
②　負の値である
③　正の値も負の値もとる

(3)　△AID，△BEF，△CGH の面積をそれぞれ T_1，T_2，T_3とする。このとき，$\boxed{\text{ヌ}}$ である。

$\boxed{\text{ヌ}}$ の解答群

⓪　$a < b < c$ならば，$T_1 > T_2 > T_3$
①　$a < b < c$ならば，$T_1 < T_2 < T_3$
②　Aが鈍角ならば，$T_1 < T_2$かつ $T_1 < T_3$
③　a，b，cの値に関係なく，$T_1 = T_2 = T_3$

（数学Ⅰ，数学Ａ第１問は次ページに続く。）

⑷　△ABC，△AID，△BEF，△CGH のうち，外接円の半径が最も小さいものを求める。

$0° < A < 90°$のとき，ID $\boxed{ネ}$ BCであり

（△AID の外接円の半径） $\boxed{ノ}$ （△ABC の外接円の半径）

であるから，外接円の半径が最も小さい三角形は

- $0° < A < B < C < 90°$のとき， $\boxed{ハ}$ である。
- $0° < A < B < 90° < C$のとき， $\boxed{ヒ}$ である。

$\boxed{ネ}$ ， $\boxed{ノ}$ の解答群（同じものを繰り返し選んでもよい。）

⓪ <	① ＝	② >

$\boxed{ハ}$ ， $\boxed{ヒ}$ の解答群（同じものを繰り返し選んでもよい。）

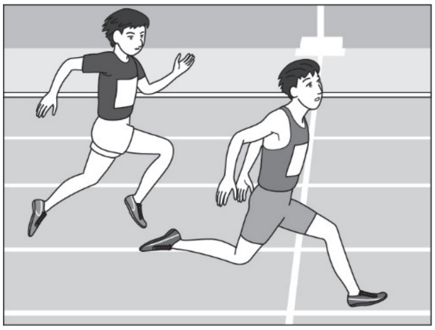
⓪ △ABC	① △AID	② △BEF	③ △CGH

（下書き用紙）

数学Ⅰ，数学Ａの試験問題は次に続く。

第２問 （配点　30）

〔１〕陸上競技の短距離 100m 走では，100 m を走るのにかかる時間（以下，タイムと呼ぶ）は，1 歩あたりの進む距離（以下，ストライドと呼ぶ）と 1 秒あたりの歩数（以下，ピッチと呼ぶ）に関係がある。ストライドとピッチはそれぞれ以下の式で与えられる。



$$\text{ストライド（m/歩）} = \frac{100\text{（m）}}{100\text{mを走るのにかかった歩数（歩）}}$$

$$\text{ピッチ（歩/秒）} = \frac{100\text{mを走るのにかかった歩数（歩）}}{\text{タイム（秒）}}$$

ただし，100m を走るのにかかった歩数は，最後の 1 歩がゴールラインをまたぐこともあるので，小数で表される。以下，単位は必要のない限り省略する。

例えば，タイムが 10.81 で，そのときの歩数が 48.5 であったとき，ストライドは $\dfrac{100}{48.5}$ より約 2.06，ピッチは $\dfrac{48.5}{10.81}$ より約 4.49 である。

なお，小数の形で解答する場合は，**解答上の注意**にあるように，指定された桁数の一つ下の桁を四捨五入して答えよ。また，必要に応じて，指定された桁まで⓪にマークせよ。

（数学Ⅰ，数学Ａ第２問は次ページに続く。）

(1)　ストライドを x，ピッチを z とおく。ピッチは1秒あたりの歩数，ストライドは1歩あたりの進む距離なので，1秒あたりの進む距離すなわち平均速度は，x と z を用いて $\boxed{\text{ア}}$ （m/秒）と表される。

これより，タイムと，ストライド，ピッチとの関係は

$$\text{タイム} = \frac{100}{\boxed{\text{ア}}} \qquad \cdots\cdots ①$$

と表されるので，$\boxed{\text{ア}}$ が最大になるときにタイムが最もよくなる。ただし，タイムがよくなるとは，タイムの値が小さくなることである。

$\boxed{\text{ア}}$ の解答群

⓪ $x+z$	① $z-x$	② xz
③ $\dfrac{x+z}{2}$	④ $\dfrac{z-x}{2}$	⑤ $\dfrac{xz}{2}$

（数学Ⅰ，数学Ａ第２問は次ページに続く。）

(2)　男子短距離 100m走の選手である太郎さんは，①に着目して，タイムが最もよくなるストライドとピッチを考えることにした。

次の表は，太郎さんが練習で 100mを 3 回走ったときのストライドとピッチのデータである。

	1 回目	2 回目	3 回目
ストライド	2.05	2.10	2.15
ピッチ	4.70	4.60	4.50

また，ストライドとピッチにはそれぞれ限界がある。太郎さんの場合，ストライドの最大値は 2.40，ピッチの最大値は 4.80 である。

太郎さんは，上の表から，ストライドが 0.05 大きくなるとピッチが 0.1 小さくなるという関係があると考えて，ピッチがストライドの 1 次関数として表されると仮定した。このとき，ピッチ z はストライド x を用いて

$$z = \boxed{イウ}\,x + \frac{\boxed{エオ}}{5} \qquad \cdots\cdots\cdots\cdots \ ②$$

と表される。

②が太郎さんのストライドの最大値 2.40 とピッチの最大値 4.80 まで成り立つと仮定すると，x の値の範囲は次のようになる。

$$\boxed{カ}\,.\,\boxed{キク} \leqq x \leqq 2.40$$

（数学Ⅰ，数学Ａ第２問は次ページに続く。）

$y=$ $\boxed{\text{ア}}$ とおく。②を $y=$ $\boxed{\text{ア}}$ に代入することにより，y を x の関数として表すことができる。太郎さんのタイムが最もよくなるストライドとピッチを求めるためには，$\boxed{\text{カ}}$．$\boxed{\text{キク}}$ $\leqq x \leqq 2.40$ の範囲で y の値を最大にする x の値を見つければよい。このとき，y の値が最大になるのは $x=$ $\boxed{\text{ケ}}$．$\boxed{\text{コサ}}$ のときである。

よって，太郎さんのタイムが最もよくなるのは，ストライドが $\boxed{\text{ケ}}$．$\boxed{\text{コサ}}$ のときであり，このとき，ピッチは $\boxed{\text{シ}}$．$\boxed{\text{スセ}}$ である。また，このときの太郎さんのタイムは，①により $\boxed{\text{ソ}}$ である。

$\boxed{\text{ソ}}$ については，最も適当なものを，次の⓪～⑤のうちから一つ選べ。

⓪ 9.68	① 9.97	② 10.09
③ 10.33	④ 10.42	⑤ 10.55

（数学Ⅰ，数学Ａ第２問は次ページに続く。）

〔２〕太郎さんと花子さんは，社会のグローバル化に伴う都市間の国際競争において，都市周辺にある国際空港の利便性が重視されていることを知った。そこで，日本を含む世界の主な 40 の国際空港それぞれから最も近い主要ターミナル駅へ鉄道等で移動するときの「移動距離」，「所要時間」，「費用」を調べた。なお，「所要時間」と「費用」は各国とも午前 10 時台で調査し，「費用」は調査時点の為替レートで日本円に換算した。

（数学Ⅰ，数学Ａ第２問は次ページに続く。）

以下では，データが与えられた際，次の値を外れ値とする。

「(第１四分位数)－1.5×(四分位範囲)」以下のすべての値

「(第３四分位数)＋1.5×(四分位範囲)」以上のすべての値

(1) 次のデータは，40 の国際空港からの「移動距離」（単位はkm）を並べたものである。

56	48	47	42	40	38	38	36	28	25
25	24	23	22	22	21	21	20	20	20
20	20	19	18	16	16	15	15	14	13
13	12	11	11	10	10	10	8	7	6

このデータにおいて，四分位範囲は $\boxed{\text{タチ}}$ であり，外れ値の個数は $\boxed{\text{ツ}}$ である。

（数学Ⅰ，数学Ａ第２問は次ページに続く。）

⑵　図 1 は「移動距離」と「所要時間」の散布図，図 2 は「所要時間」と「費用」の散布図，図 3 は「費用」と「移動距離」の散布図である。ただし，白丸は日本の空港，黒丸は日本以外の空港を表している。また，「移動距離」，「所要時間」，「費用」の平均値はそれぞれ 22，38，950 であり，散布図に実線で示している。

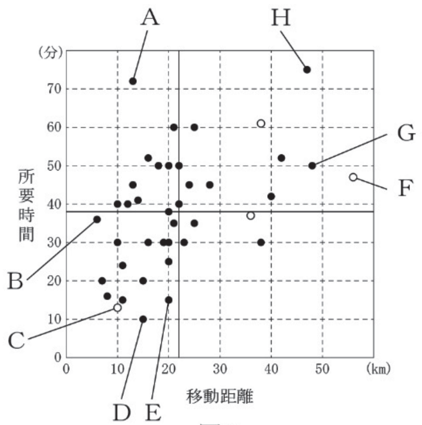


図 1

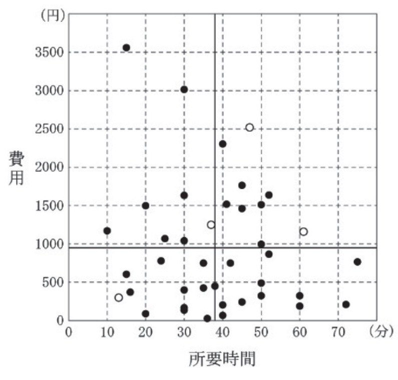


図 2

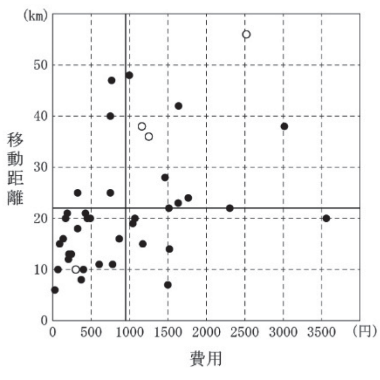
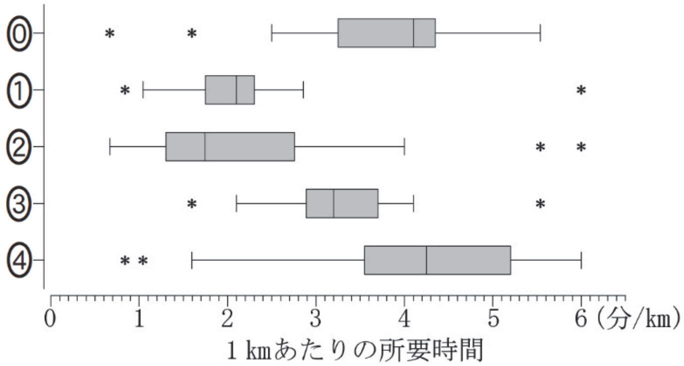


図 3

(i)　40 の国際空港について，「所要時間」を「移動距離」で割った「1 kmあたりの所要時間」を考えよう。外れ値を＊で示した「1 kmあたりの所要時間」の箱ひげ図は $\boxed{\text{テ}}$ であり，外れ値は図 1 のＡ～Ｈのうちの $\boxed{\text{ト}}$ と $\boxed{\text{ナ}}$ である。

（数学Ⅰ，数学Ａ第２問は次ページに続く。）

$\boxed{テ}$ については，最も適当なものを，次の⓪～④のうちから一つ選べ。



$\boxed{ト}$，$\boxed{ナ}$ の解答群（解答の順序は問わない。）

⓪ A　① B　② C　③ D　④ E　⑤ F　⑥ G　⑦ H

(ii) ある国で，次のような新空港が建設される計画があるとする。

移動距離（km）	所要時間（分）	費用（円）
22	38	950

次の（Ⅰ），（Ⅱ），（Ⅲ）は，40 の国際空港にこの新空港を加えたデータに関する記述である。

（Ⅰ）　新空港は，日本の四つのいずれの空港よりも，「費用」は高いが「所要時間」は短い。

（Ⅱ）　「移動距離」の標準偏差は，新空港を加える前後で変化しない。

（Ⅲ）　図 1，図 2，図 3 のそれぞれの二つの変量について，変量間の相関係数は，新空港を加える前後で変化しない。

（Ⅰ），（Ⅱ），（Ⅲ）の正誤の組合せとして正しいものは $\boxed{ニ}$ である。

$\boxed{ニ}$ の解答群

	⓪	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
（Ⅰ）	正	正	正	正	誤	誤	誤	誤
（Ⅱ）	正	正	誤	誤	正	正	誤	誤
（Ⅲ）	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤

（数学Ⅰ，数学Ａ第２問は次ページに続く。）

(3)　太郎さんは，調べた空港のうちの一つであるＰ空港で，利便性に関するアンケート調査が実施されていることを知った。

太郎：Ｐ空港を利用した 30 人に，Ｐ空港は便利だと思うかどうかをたずねたとき，どのくらいの人が「便利だと思う」と回答したら，Ｐ空港の利用者全体のうち便利だと思う人の方が多いとしてよいのかな。

花子：例えば，20 人だったらどうかな。

二人は，30 人のうち 20 人が「便利だと思う」と回答した場合に，「Ｐ空港は便利だと思う人の方が多い」といえるかどうかを，次の**方針**で考えることにした。

方針

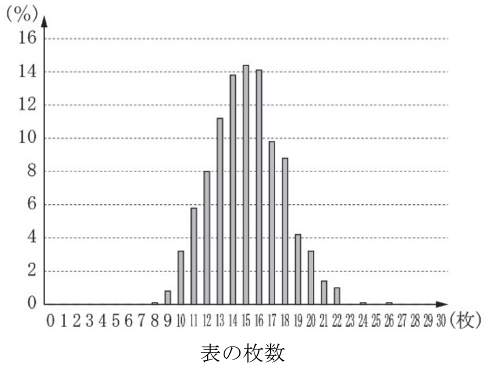
- “Ｐ空港の利用者全体のうちで「便利だと思う」と回答する割合と，「便利だと思う」と回答しない割合が等しい”という仮説をたてる。
- この仮説のもとで，30 人抽出したうちの 20 人以上が「便利だと思う」と回答する確率が5％未満であれば，その仮説は誤っていると判断し，5％以上であれば，その仮説は誤っているとは判断しない。

（数学Ⅰ，数学Ａ第２問は次ページに続く。）

次の**実験結果**は，30 枚の硬貨を投げる実験を 1000 回行ったとき，表が出た枚数ごとの回数の割合を示したものである。

実験結果

表の枚数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
割合	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.8%	
表の枚数	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
割合	3.2%	5.8%	8.0%	11.2%	13.8%	14.4%	14.1%	9.8%	8.8%	4.2%	
表の枚数	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
割合	3.2%	1.4%	1.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%



実験結果を用いると，30 枚の硬貨のうち 20 枚以上が表となった割合は $\boxed{\text{ヌ}}$. $\boxed{\text{ネ}}$ %である。これを，30 人のうち 20 人以上が「便利だと思う」と回答する確率とみなし，**方針**に従うと，「便利だと思う」と回答する割合と,「便利だと思う」と回答しない割合が等しいという仮説は $\boxed{\text{ノ}}$ ，Ｐ空港は便利だと思う人の方が $\boxed{\text{ハ}}$ 。

$\boxed{\text{ノ}}$ ，$\boxed{\text{ハ}}$ については，最も適当なものを，次のそれぞれの解答群から一つずつ選べ。

$\boxed{\text{ノ}}$ の解答群

⓪ 誤っていると判断され	① 誤っているとは判断されず

$\boxed{\text{ハ}}$ の解答群

⓪ 多いといえる	① 多いとはいえない

第３問（配点　20）

$\triangle$ABCにおいて，$AB = 3$，$BC = 4$，$AC = 5$とする。

$\angle$BACの二等分線と辺BCとの交点をDとすると

$$BD = \frac{\boxed{\text{ア}}}{\boxed{\text{イ}}}，\ AD = \frac{\boxed{\text{ウ}}\sqrt{\boxed{\text{エ}}}}{\boxed{\text{オ}}}$$

である。

また，$\angle$BAC の二等分線と$\triangle$ABC の外接円 O との交点で点 A とは異なる点を E とする。$\triangle$AECに着目すると

$$AE = \boxed{\text{カ}}\sqrt{\boxed{\text{キ}}}$$

である。

$\triangle$ABC の 2 辺 AB と AC の両方に接し，外接円 O に内接する円の中心を P とする。円 P の半径を r とする。さらに，円 P と外接円 O との接点を F とし，直線 PF と外接円 O との交点で点 F とは異なる点を G とする。このとき

$$AP = \sqrt{\boxed{\text{ク}}}\,r,\ PG = \boxed{\text{ケ}} - r$$

と表せる。したがって，方べきの定理により$r = \dfrac{\boxed{\text{コ}}}{\boxed{\text{サ}}}$である。

（数学Ⅰ，数学Ａ第３問は次ページに続く。）

△ABC の内心を Q とする。内接円 Q の半径は $\boxed{シ}$ で，$\mathrm{AQ}=\sqrt{\boxed{ス}}$ である。

また，円 P と辺 AB との接点を H とすると，$\mathrm{AH}=\dfrac{\boxed{セ}}{\boxed{ソ}}$ である。

以上から，点 H に関する次の (a)，(b) の正誤の組合せとして正しいものは $\boxed{タ}$ である。

(a)　点 H は 3 点 B，D，Q を通る円の周上にある。

(b)　点 H は 3 点 B，E，Q を通る円の周上にある。

$\boxed{タ}$ の解答群

	⓪	①	②	③
(a)	正	正	誤	誤
(b)	正	誤	正	誤

第４問 （配点　20）

中にくじが入っている二つの箱ＡとＢがある。二つの箱の外見は同じであるが，箱Ａでは，当たりくじを引く確率が $\dfrac{1}{2}$ であり，箱Ｂでは，当たりくじを引く確率が $\dfrac{1}{3}$ である。

(1)　各箱で，くじを１本引いてはもとに戻す試行を３回繰り返す。このとき

箱Ａにおいて，３回中ちょうど１回当たる確率は $\dfrac{\boxed{\text{ア}}}{\boxed{\text{イ}}}$　　… ①

箱Ｂにおいて，３回中ちょうど１回当たる確率は $\dfrac{\boxed{\text{ウ}}}{\boxed{\text{エ}}}$　　… ②

である。箱Ａにおいて，３回引いたときに当たりくじを引く回数の期待値は $\dfrac{\boxed{\text{オ}}}{\boxed{\text{カ}}}$ であり，箱Ｂにおいて，３回引いたときに当たりくじを引く回数の期待値は $\boxed{\text{キ}}$ である。

（数学Ⅰ，数学Ａ第４問は次ページに続く。）

⑵　太郎さんと花子さんは，それぞれくじを引くことにした。ただし，二人は，箱Ａ，箱Ｂでの当たりくじを引く確率は知っているが，二つの箱のどちらがＡで，どちらがＢであるかはわからないものとする。

まず，太郎さんが二つの箱のうちの一方をでたらめに選ぶ。そして，その選んだ箱において，くじを１本引いてはもとに戻す試行を３回繰り返したところ，３回中ちょうど１回当たった。

このとき，選ばれた箱がＡである事象をA，選ばれた箱がＢである事象をB，３回中ちょうど１回当たる事象をWとする。①，②に注意すると

$$P(A\cap W)=\frac{1}{2}\times\frac{\boxed{\text{ア}}}{\boxed{\text{イ}}},\quad P(B\cap W)=\frac{1}{2}\times\frac{\boxed{\text{ウ}}}{\boxed{\text{エ}}}$$

である。$P(W)=P(A\cap W)+P(B\cap W)$であるから，３回中ちょうど１回当たったとき，選んだ箱がＡである条件付き確率$P_W(A)$は$\frac{\boxed{\text{クケ}}}{\boxed{\text{コサ}}}$となる。また，条件付き確率$P_W(B)$は$1-P_W(A)$で求められる。

（数学Ⅰ，数学Ａ第４問は次ページに続く。）

次に，花子さんが箱を選ぶ。その選んだ箱において，くじを１本引いてはもとに戻す試行を３回繰り返す。花子さんは，当たりくじをより多く引きたいので，太郎さんのくじの結果をもとに，次の(X)，(Y)のどちらの場合がよいかを考えている。

（X） 太郎さんが選んだ箱と同じ箱を選ぶ。

（Y） 太郎さんが選んだ箱と異なる箱を選ぶ。

花子さんがくじを引くときに起こりうる事象の場合の数は，選んだ箱がA，Bのいずれかの２通りと，３回のうち当たりくじを引く回数が０，１，２，３回のいずれかの４通りの組合せで全部で８通りある。

花子：当たりくじを引く回数の期待値が大きい方の箱を選ぶといいかな。

太郎：当たりくじを引く回数の期待値を求めるには，この８通りについて，それぞれの起こる確率と当たりくじを引く回数との積を考えればいいね。

花子さんは当たりくじを引く回数の期待値が大きい方の箱を選ぶことにした。

(X)の場合について考える。箱Aにおいて３回引いてちょうど１回当たる事象をA_1，箱Bにおいて３回引いてちょうど１回当たる事象をB_1と表す。

太郎さんが選んだ箱がAである確率$P_W(A)$を用いると，花子さんが選んだ箱がAで，かつ，花子さんが３回引いてちょうど１回当たる事象の起こる確率は$P_W(A) \times P(A_1)$と表せる。このことと同様に考えると，花子さんが選んだ箱がBで,かつ,花子さんが３回引いてちょうど１回当たる事象の起こる確率は $\boxed{シ}$ と表せる。

花子：残りの６通りも同じように計算すれば，この場合の当たりくじを引く回数の期待値を計算できるね。

太郎：期待値を計算する式は，選んだ箱がAである事象に対する式とBである事象に対する式に分けて整理できそうだよ。

（数学Ⅰ，数学A第４問は次ページに続く。）

残りの６通りについても同じように考えると，(X)の場合の当たりくじを引く回数の期待値を計算する式は

$$\boxed{\text{ス}} \times \frac{\boxed{\text{オ}}}{\boxed{\text{カ}}} + \boxed{\text{セ}} \times \boxed{\text{キ}}$$

となる。

(Y)の場合についても同様に考えて計算すると，(Y)の場合の当たりくじを引く回数の期待値は $\dfrac{\boxed{\text{ソタ}}}{\boxed{\text{チツ}}}$ である。よって，当たりくじを引く回数の期待値が大きい方の箱を選ぶという方針に基づくと，花子さんは，太郎さんが選んだ箱と $\boxed{\text{テ}}$ 。

$\boxed{\text{シ}}$ の解答群

⓪ $P_W(A) \times P(A_1)$	① $P_W(A) \times P(B_1)$
② $P_W(B) \times P(A_1)$	③ $P_W(B) \times P(B_1)$

$\boxed{\text{ス}}$ ，$\boxed{\text{セ}}$ の解答群（同じものを繰り返し選んでもよい。）

⓪ $\dfrac{1}{2}$	① $\dfrac{1}{4}$	② $P_W(A)$	③ $P_W(B)$
④ $\dfrac{1}{2}P_W(A)$		⑤ $\dfrac{1}{2}P_W(B)$	
⑥ $P_W(A) - P_W(B)$		⑦ $P_W(B) - P_W(A)$	
⑧ $\dfrac{P_W(A) - P_W(B)}{2}$		⑨ $\dfrac{P_W(B) - P_W(A)}{2}$	

$\boxed{\text{テ}}$ の解答群

⓪ 同じ箱を選ぶ方がよい	① 異なる箱を選ぶ方がよい